



東京都小笠原
亜熱帯農業センター(父島)
Tel.04998-2-2104
Fax.04998-2-2565
営農研修所 (母島)
Tel.04998-3-2129
Fax.04998-3-2006
畜産指導所 (母島)
Tel.04998-3-2275
Fax.04998-3-2276

～ センターは小笠原農業振興の情報発信地 ～

明けましておめでとうございます。

昨年は、台風 12 号の来襲がありましたが、大きな被害とはならずほっとしております。

当センターは、亜熱帯気候という小笠原の特性を活かし、高い収益を実現できる農業を目指して試験研究に取り組んできました。現在、小笠原農業の収益の柱となっているパッションフルーツ、ミニトマトをはじめ、マンゴーや菊池レモンなど熱帯果樹や野菜類の安定生産に向けた技術の確立、作物に発生する様々な病気への対処やアフリカマイマイなどの害虫による被害の調査や防除法に関する各種試験研究などを行なっています。また、営農や畜産の経営指導にも力を入れて取り組んできました。

このような試験研究や経営指導は、農業生産者の皆様のお力添えがなければ実現できません。これまでと同様に、圃場を訪問させていただくなど、当センター事業へのご協力をお願いすることがありますが、ご理解を賜れば幸いです。

当然のことながら、この結果は小笠原農業の現場に還元してこそ価値のあるものとなります。皆様におかれましても、お気軽に当センターに足を運んでいただき、栽培方法などについてお尋ねいただければ、お役に立てる場面が増えると考えております。

また、昨年に引き続き、本年も2月に研究成果発表会、4月の科学技術週間には試験研

究施設の公開を行い、広く当センターの業務を紹介しながら農業について考えていただく場を提供したいと考えております。お一人でも多いご来場をお待ちしております。

同時に、当センターは、本来の使命である農業の試験研究活動を事業の中心に添えながらも、小笠原での環境学習や自然観察の場としてもお役に立っていく所存です。

ご存知のように小笠原は世界遺産登録の推進に向けて取り組んでおります。当センターでは固有植物の保存展示やオガサワラオオコウモリ等による被害防止対策を実証展示し島民の方々に還元するとともに、登録を農業振興の好機と捉え、小笠原の農産物が都民だけではなく、全国にファンを広め、販売が拡大するように、皆様と一緒に取り組んでいく所存です。

平成 23 年が始まった今、当センターの職員一同、小笠原の産業振興に向けた気構えを新たにしているところです。引き続き、皆様のご支援を賜りますことをお願い申し上げ、年頭の挨拶とさせていただきます。

＜産業課長：大鳥居＞

成果発表会のお知らせ

平成 22 年度研究成果発表会を母島は 2 月 14 日に、父島は 17 日に開催します。関係者には詳細を別途お知らせします。＜金子＞

～ 畜産指導所からトピック2題 ～

1 鶏の処分方法を導入

現在、小笠原村では約400羽の採卵鶏が飼育されています。しかし、飼育羽数の割に生産される鶏卵は多くありません。これは産卵能力が低下した老齢鶏が多くいることが大きな要因です。しかし、更新時に数十羽の鶏を一度に処分することは大変でなかなか実行できない事情があります。

そこで、畜産指導所では、数十羽程度の鶏を処分する簡易な方法を開発しました。炭酸ガスによる窒息法で、安全かつ省力的に鶏の処分が可能です。

処分する鶏は鶏舎より捕獲し、容量75リットルのタルに入れます。このタルに炭酸ガスのボンベに連結したホースを接続して、ガスを3分ほど注入します。鶏に対して炭酸ガスには麻酔効果があるため、苦しみを与えずに安楽死させることができ、作業も5分ほどで終了します。鶏は埋設処分します。一度にタルに採卵鶏で8羽、ウコッケイでは15羽を入れることができます。



写真1 タルと炭酸ガスボンベ

炭酸ガス自体は人体に対して無害であり、ボンベの操作を覚えれば安全に処分が行えます。

この方法の導入で、少羽数の飼養農家でも計画的な鶏の更新が可能になりました。

2 繁殖用和牛がやってきた！

畜産指導所では、繁殖牛を8～10頭飼養して繁殖素牛と肥育素牛の生産を行っています。以前は定期的に島外から繁殖素牛を導入して、繁殖牛の入れ替えによる系統の更新を行っていました。

しかし、近年では、計画的な素牛の導入が行われていませんでした。その結果、指導所の繁殖牛の老齢化が進行して、なかなか妊娠しない長期不受胎牛が現れるようになりました。

その対策として、長期不受胎牛を廃用して12月に（財）東京都農林総合研究センター青梅庁舎より優良系統の繁殖牛を譲り受け、牛群の更新を行いました。

導入した繁殖牛は2頭(表1・写真2)で、1頭は1月中旬に分娩予定の妊娠牛で、もう1頭は12ヶ月齢の子牛です。今後この2頭が指導所のエースとして繁殖素牛の生産に活躍するものと期待しています。

表1 導入した牛

名号	生年月日	分娩予定	産次	父親
ともみ	H18. 4. 4	H23. 1. 19	1	
かりん	H21. 12. 24	—	0	茂勝栄



写真2 母島にやってきた牛たち

<畜産指導所長：舩屋>

～ キュウリのうどんこ病抵抗性の比較～

キュウリ栽培において、農薬をできるだけ使用しないようにするには病害抵抗性品種を選択することが重要です、しかし、種苗会社が異なる場合など、カタログに記載されている病害抵抗性を示す用語から単純に品種の強弱を比較することはできません。

そこで、農業センターでは、4品種のキュウリを導入して、小笠原でのうどんこ病抵抗性の程度について調査しました。

表2 キュウリ4品種のうどんこ病抵抗性

品 種	種苗会社	うどんこ病
夏すずみ	タキイ種苗	強 い
つばさ	タキイ種苗	強 い
フリーダム	サカタのタネ	極 強
よしなり	サカタのタネ	極 強

*カタログに記載されている用語

実施時期：2009年4月～7月

圃場：鉄骨ハウス内雨よけ栽培



写真3 夏すずみ (発病度: 40)



写真4 つばさ (発病度: 24)



写真5 フリーダム (発病度: 34)



写真6 よしなり (発病度: 100)

栽培期間中、病害抵抗性を比較したところ、「つばさ」が最もうどんこ病に強いことがわかりました(写真4)。 <近藤>

コーヒー栽培で使用できる農薬

コーヒーノキは「果樹類」作物群に分類され、果樹類に登録のある農薬を使用することができます。しかし、薬害の可能性が十分確認されていない農薬が含まれておりますので、使用に当たっては事前に農業センターにご相談ください。

果樹類に登録のある主な農薬

農 薬	系統区分	対象病害虫
石灰硫黄合剤	無機硫黄	ハダニ類, サビダニ類
アカリタッチ乳剤	天然物由来	ハダニ類
粘着くん水和剤	天然物由来	アブラムシ類, ハダニ類
オレート液剤	他	アブラムシ類

～ 父島でのノヤギの駆除について ～

昨年度の農業センターニュースで「これからのノヤギの駆除について」と題して属島や父島で実施しているノヤギ駆除について紹介しました。その中で、環境省や東京都が新たにノヤギの駆除事業を検討していることをお知らせしましたが、今年度からの事業実施に向け、その具体的な内容が決まりつつあります。今回のニュースでは、これまで父島で実施してきた取り組み実績などを振り返りながら、今年度から父島で実施する新たな取り組みについてご紹介します。

1. これまでの取組

父島では、野生化したヤギによる農業被害防止のため、東京都が昭和 51 年から 3 年間にわたりノヤギ駆除を実施しました。事業終了時点ではかなり減少したノヤギでしたが、その後、ふたたび増加し、再度、農業への影響が懸念されたことから、昭和 63 年度から平成 3 年度までの 4 年間、ノヤギの駆除を再開しました。平成 4 年度からは村により現在に至るまで駆除が実施されています。ここ 5 年間の村による駆除実績は表 3 のとおりです。平均約 250 頭の駆除を毎年行っています。

表 3 過去 5 年間の村によるノヤギ駆除実績 (単位: 頭)

年度	H17	H18	H19	H20	H21
頭数	147	328	300	258	233

昭和 53 年に駆除した後、駆除を行わなかった結果、10 年後には、再びノヤギが急激に増加してしまいました。現在、過去に経験したような激増を抑制しているのは、村によって継続的にノヤギの駆除を行っている成果だと考えられます。

2. 今年度からの取組

これまでご紹介したとおり、ここ数十年、父島では、農業被害対策として村が主体となりノヤギの駆除を行ってきました。しかし、今年度から状況が変わりつつあります。あまり駆除の行われていなかった父島東部、南部において、国、都が新たにノヤギの駆除を実施する予定です。

東京都では、平成 23 年 1 月から、父島の中でも特にノヤギの生息密度が高いと思われる島南部の駆除を実施します。駆除は当面、銃器により実施



図 1 村・国・都によるノヤギ駆除位置

する予定ですが、これまで他島で実績のある追い込みなどによる駆除も南袋沢周辺で試行し、効果的な方法で実施していく予定です。

また、環境省でも平成 23 年 1 月から数年にわたって、東平地区に設置しているノヤギ排除柵内において、くくりわなと銃器を併用し、駆除を行う予定です。

いよいよ父島全域にわたって本格的にノヤギの駆除が行われます。これから全島根絶に向けて、各機関が協力、連携してノヤギの駆除を行っていきます。島民の皆さまのご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

＜産業課鳥獣担当：千葉＞

平成 22 年度から隔月発行となりました。本年もよろしくお願い致します。＜編集担当：宗＞